

LIFEV - 言語の違いを越えて世界を学ぶ  
**異文化を探究しよう**

< 配当時間数 14時間 >

交流活動の成果を、探求活動や表現活動に発展させる。小グループで活動した成果をクラスで共有し、異文化理解を深める。

キーワード：異文化理解 国際交流

コミュニケーション



## 1. 単元の目標

この単元では、前単元で興味を持ったテーマについて探求活動を展開し、TCへの理解を深め、プレゼンテーション活動を通じて、その成果をクラスで共有する。その過程で、グループ活動で自分の責任を果たすことの重要性に気づかせ、コミュニケーションの効果高めるために必要な手法を考えさせる。

## 2. 単元の構成と特色

1st Step : 調査活動 (図1)



図書館や、インターネットで検索を行い、探求活動のテーマについて関連文献や資料を集め、電子メールでゲストと交流を継続する。



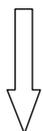
(図1：調査活動の様子)

2nd Step : 探求活動のまとめ



交流先の文化についての知識を、テーマに沿って、発表の要項を意識してまとめる。

3rd Step : 中間発表・リハーサル



教師の指導も踏まえ、生徒が自ら問題解決をすすめる。発表の目的・内容・絵図の提示のねらいは一致しているか。「聞き手」の立場を常に発表者に意識させる。



(図2：発表活動の様子)

4th Step : プレゼンテーション (図2)



聞き手は評価者としての役割も担う。

5th Step : 活動の反省



これまでの指導を踏まえ、生徒が自ら反省する時間を設ける。

## 第4章 LIFEの事例

### 3. 主題に迫るための手だて

「調査」で得た情報をそのまま写して終わりという結果を避けるために、その情報が探求のテーマの中で持つ意味を生徒に意識させる指導が大切である。

発表活動にむけて、自分たちで試行錯誤を重ねる中でベストの方法を発見できると達成感を感じることができる。評価の観点をあらかじめ明らかにし、発表者に「聞き手」を意識させると、高い質の改善につながる。

### 4. 単元における評価の観点・方法

教師が「評価」を生徒の学習を把握するために行うことは既に述べてきたが、この単元では、生徒が自ら問題解決を進めることができるように、以下の評価活動を利用させ、教師は生徒が自己改善していく過程を観察する。

#### (1) 異文化に対する興味・関心

探求活動・表現活動の過程で、どのように興味関心が深まったか、教師が原稿を分析したり、自己評価させる。

#### (2) 探求活動を深め、問題解決をすすめる能力

探求活動中は以下の3点について、生徒の自己反省も併せて、活動の様子を観察する。

グループ活動への貢献を常に積極的に思考しているか

構成員間の興味・関心の違いをお互いに理解し、認め合っているか

複数の構成員の視点を活かして、作品の質を高めようとしているか

プレゼンテーションの後に、生徒は以下の観点でグループ内で反省し、代表がまとめる。

テーマの設定 個人の役割 準備の手順やペース

発表時の役割分担 テーマについての知識の理解

#### (3) わかりやすい表現活動を展開する技能

中間発表やりハーサルを通じて得た助言や提案を発表内容の改善に結びつけるために、問題点を自分たちで指摘させ、不十分な点は補う。

生徒による相互評価の観点は以下の3つで、5段階評価する：

聴衆をひきつける工夫 絵図の提示方法 プレゼンテーションの内容

さらに「印象的だったこと」、「よくわからなかったこと」を具体的に記述させる。

教師評価には次の観点も加える： グループの協力体制 時間の使い方

### 5. 教科等との関係

データを基に実態を把握したり、ある文化を他の地域や過去と比較することは、社会科の学習を通じて育まれた知識や技能が生かされる。そして、情報を活用したり、結論を類推しながら調査や探求をすすめるためには、全教科を通じて育まれた能力が生かされる。

## 第4章 LIFEの事例

### 7. 指導のポイント

#### < 1. 調査活動の失敗を防ぐために >

調査活動は生徒にとって予想以上に時間がかかり、苦勞することである。收拾がつかなくなると後々の発表活動に影響するので、次の2点には注意したい。

#### 情報の増加に伴う、興味関心の変化に対応する

調査が進むにつれ、最初に提出した構想案とは違った原稿を持って相談にくる生徒が出てくる。「思っていた資料が無かったから」、「調べているとこちらに興味を持った」等、原因は様々である。探求活動の日程や、プレゼンテーションの実施要項（制限時間等）を常に意識させながら対応したいものである。「できあがり」の様子を想像させながら調査活動を援助しないと、調べることに時間が浪費され、不十分な成果になるので注意したい。

#### 著作権に配慮した調査活動を

「調査」で得た情報をそのまま写して終わりという結果を避けるために、その情報が発表全体の中で持つ意味を生徒に意識させる指導が大切であると既に述べたが、著作権の問題にも注意させなければならない。例えば、プレゼンテーションソフトを用いて発表活動を行う場合に、ネット上の写真や絵をどんどんコピーして貼り付けて作った資料を用いて発表すると、著作権侵害の問題が発生する。自分たちで撮った写真でなければ、本来の目的以外で許可無く複製はできない。大変手間のかかることであるが、ページの作者に利用目的を伝え、利用許可を問い合わせる手続きを必ずとらせたい。

\* 参考文献：岡本薫（2001）『マルチメディア時代の著作権』全日本社会教育連合会

#### < 2. 全部教えない >

相手の理解を促すための手だてを、生徒の限られた経験から自力で考え出すことは、容易なことではない。困っている生徒を見ると、ついつい全部教えてしまいたくなるが、それではプログラムの目標を達成することはできない。以下の点に注意したい。

#### 仮説検証のプロセスをたどらせる

発表活動の過程において、中間発表やりハーサルは非常に重要な意味を持つ。自分たちでまずやってみて、自分たちの立てた仮説の誤りに気づくのも大切なことである。

発表に不満足であっても、それに至るまでの努力のプロセスや、その後の自己評価に臨む姿勢やその内容を、総合的に評価しなくてはならない。

#### ポイントを絞って指導にあたる

教師の事前の指導は、発表内容が書物の内容を要約しただけではないか、ステレオタイプのな解釈をしていないか、プレゼンテーションの制限事項に触れていないか等にポイント

## 第4章 LIFEの事例

トを限っておくと良い。

### < 3 . 相互評価をどう活かすか >

生徒が自分たちの力で発表活動の内容を改善していくために、相互評価を利用する。  
注意すべきことは以下の通り。

#### 相互評価のメリット

聞き手である生徒が、教師によって示された観点に従って、プレゼンテーションを5段階で評価する。また、よかったこと、改善が望まれることを簡潔に自由記述する。これらの数字から平均値を出すと、聞き手の得た印象が非常にわかりやすくなる。また、自由記述もあらかじめ一覧にさせておくとよい。

#### 相互評価活動のめざすもの

相互評価は、生徒間の支えあいの活動であるこの単元を経験した生徒は、お互いが同じことで苦労したという気持ちがかち合えるはずである。相互評価をすることによって互いに学び合える学習集団を形成することにつながるであろう。

#### 教師が相互評価に臨む時に注意すべきこと

平均を出したり、一覧にする作業は、各グループに任せる。生徒のために書かれたコメントであるから、生徒が集計しても問題はない。また、図5のような集計用紙を用意しておけばそれほど時間もかからない。

また、相互評価を評点の材料としないことも大切である。生徒が生徒の成績をつけるのではなく、相互評価をどのように活かしているかを評価するのが、教師の役割である。

### < 4 . 自己評価をさせるときに >

自己評価については、発表が終わった安堵の気持ちから来る自己満足に終始しないよう、きちんと観点を示す必要がある。「同様の機会が与えられたとしたら自分はどうすべきか」という問いかけに、きちんと答えようとしているかを評価したい。

「プレゼンテーション評価用紙」集約用紙

次回の授業はこの用紙を用いて行います。重要です。

(1)について 得点別に回答者数を記入し、平均点も算出。

	5	4	3	2	1	平均点
項目						
項目						
項目						

(2)について コメントを簡条書きにし、一覧にする。同じ意見と思える記述が複数ある場合は、簡条書きした右横に( )をつけて数字を書く。

5年組 班 代表者 記入者

プレゼンのテーマ：

(図5：相互評価の集計用紙見本)